OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	発語内行為における意味と力 : コーエンの言語行為論批判
Author(s)	安本, 英奈
Citation	年報人間科学. 2004, 25, p. 125-138
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/4938
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

発語内行為における意味と力

――コーエンの言語行為論批判――

安本　英奈

〈要旨〉

オースティンは、発言には意味と力があると主張している。この考えに対して、様々な批判がなされてきた。コーエンの批判は、オースティンの行った意味と力の区別に対する批判である。そして、それは、現在でも言語行為論否定説として記憶されている。

ここでは、コーエンの論文 Do Illocutio-nary Forces Exist? の中に見られる、論点のいくつかを取り出し、それらの論点に関連しているオースティンの主張を明確にすることによって、コーエンの挙げている問題を回避する。コーエンの行っている議論は、オースティンが行為遂行的発言を規定する上で十分とは見做さなかったある種の動詞に依拠しており、何かを行うものとしての行為遂行的発言の特徴を規定するには至っていない。

オースティンの分析は何かを行っているものとしての行為遂行的発言の分析である。オースティンの方向性で分析をしていくと、意味と力は区別されなければならない。

キーワード

意味、力、発語内行為、発語行為、行為遂行的発言、事実確認的発言、コーエン、オースティン

序

コーエンの批判に耐えうる形でオースティンの言語行為論を擁護することは、言語行為論への理解を深めることにもつながる。コーエンの論文は四部構成になっており、第二部では、コーエンの考えている、オースティンの言語行為論における問題点が挙げられている。この論文では、第二部のコーエンの批判で最も中心的と見られる批判の幾つかをピックアップし、見ていく。

Ⅰコーエンの批判

a　行為遂行的接頭辞と that 節

なぜ発言には意味と力が存在し、意味だけが発言に存在してはいけないのか、というコーエンの疑問は次の批判の中で具体的に示されていく。コーエンは「私はあなたの干草の山に火がついていることを警告します（I warn you that your haystack is on fire）」という例文を用いて、オースティンの主張を論駁することを試みている。

コーエンは、力を行為遂行的接頭辞に、そして意味を that 節以降に見出すというありがちな考え方を吟味している。この考え方によると、動詞を含む行為遂行的接頭辞には力が含まれ、that 節の部分には意味が含まれるという仕方で、意味と力は分離される。実際、このような形で意味と力が分離されることは現実の発言ではありうる。オースティンもこの分離の可能性を模索していた。しかし、オースティンは、行為遂行的発言部分（例えば I state that）と、真偽を必要とする that 節の部分に文を分離させることは悪くないと考えているが、オースティンによれば、多くの場合、現実の言語の在り方がそのような分離を許さない[1]。したがって、顕在的行為遂行的発言形式としてオースティンが that 節を含む文形式を例に説明していることをもとに、行為遂行的接頭辞には力を、that 節には意味をコーエンのように見出そうとするのは誤りである。オースティンが、現実の発言の多様性を考慮し、そのような区別が決定的だと言っていなかったことを思いだすべきであろう。

現実の発言の多様性への考慮は次のオースティンの顕在的行為遂行的発言に関する次の記述にも表れている。

> 「それらは、（全て）とても顕著で不明瞭ではない表現である『私は賭ける（I bet）』『私は約束する（I promise）』『私は譲渡する（I bequeath）』などによって始まる（中略）しかし、当然のことながら、そのことと同様に、あまりにも明確で、重要なことは、私達は度々『行け（go）』という発言を用いることによって『私はあなたに行くことを命令する（I order you to go）』という発言によって達成することのできることと実質的には同じことを達成する。[2]」

ところが、コーエンは、このような文の分離によって意味と力を

割り当てることがオースティンの考えだと想定した上で、以下に行為遂行的接頭辞にも意味が見出されるということを示し、オースティンの考えに問題があるとしている。コーエンによると、

（1）行為遂行的接頭辞にも意味はある。I, you が指示を、warn が意義を示している。

（2）行為遂行的接頭辞は発語行為に変化を与えるはずである。なぜなら、この発言は、意味行為 rhetic は含まないとしても音声行為 phonetic、用語行為 phatic によっては構成されているはずだから。「私は、あなたの干草の山に火がついていることを警告する」という発言と、ただ単に「干草の山に火がついている」という発言において見られる発語行為は、異なった種類のものである。

この二つの疑問点[3]に対する、オースティンの答えをコーエンは次のようなものと考えている。すなわち、人称代名詞は行為遂行的接頭辞においては指示としての役割をもたない。そして、音声行為と用語行為が異なっていたとしても意味行為は同じである[4]。コーエンは、（1）（2）に対するオースティンの答えをこのように想定し、二つの批判は決定的なものではないとしている。

コーエンは、この二つの批判は決定的ではないとしても次に挙げる三つ目の批判は簡単に論駁できないものであると述べている。その批判とは次のようなものである。

もし、全ての発語内行為は発語行為でもあるならば、「私は訴える（I protest）」（と議長があなたに話すことを許可しなかった場合に言い）または、「私は謝ります（I apologize）」（と誰かの足を偶然踏んでしまった場合に言い）又は、「私は下がります（I withdraw）」「私は貴方にお祝いの言葉を述べます（I congratulate you）」「私はあなたに感謝します（I thankyou）」「私はあなたを祝福します（I bless you）」「私はあなたを指名する（I nominate you）」などや、その他の自己充足的な（self sufficient）表現は意味だけでなく発語内的力も持たなければならない。しかし、上記の潜在的に行為遂行的である表現はそれ自身だけで発言され、意味を持つなら、従属節（that 節だけでない）を付け加えられても、その意味は失われないはずである。コーエンは行為遂行的接頭辞に意味が含まれるということから、that 節を付け加えた形式の発言の意味も行為遂行的接頭辞の意味を保存した意味になると述べている。

動詞には意味だけが含まれるというコーエンの議論はオースティンの主張と矛盾するものではない。オースティンは行為遂行的動詞が意味だけを持つ場合もあるということに気付いていた。コーエンの言う「私はあなたに警告する（I warn you）。」という行為遂行的接頭辞に関する分析に関連させて、次のオースティンの挙げている注意点を吟味したい。

「実効的（operative）な言葉は、必ずしも行為遂行的とはいえない。[5]」

「命令形（imperative mood）である全ての動詞は、行為遂行的とは限らない。[6]」

初めにあげた引用は、発語行為の中に実効的動詞、すなわち、「警告する（warn）」や「抗議する（protest）」などが含まれているとき、それは行為遂行的ではないというオースティンの説明の中で主張されていることである。二番目の引用の箇所ではオースティンは、何が命令的で何が命令的ではないか、という分析に入るよりも、一人称のある種の動詞に注目する方を選んでいる。なぜ、分析の方向をそのように選んだかと言うと、発言が行為になるという現象の解明を行おうとしていたためである。発言が行為になるということは、発言の瞬間に、言葉を発する人によって何かが行われてなければならないということである。発言が行為になるという現象と力の問題をコーエンは結びつけることをしていない。

コーエンの分析は、オースティンの発語行為（locution）に関する分析の範囲に収められるものである。コーエンが誤りであると考える、発言には意味の他に力も存在するというオースティンの主張は、行為遂行的発言と事実確認的発言の区別がうまくいかない理由、そして、明らかに何らかの行為を行っている発言が存在することを説明していく中で、明確にしていきたい。まず、意味だけでは行為にならないということをコーエンの批判に則して説明したい。

b　発語行為

「私は抗議する（I protest）」という発言は抗議していることを説明しているのではなく、抗議を行っている。このような発言における意味とはコーエンによると、行為遂行的な意味とでも呼べるものである。そして、コーエンはなぜこの種の発言の意味を行為遂行的意味ということができるかというと、正確な翻訳の中に、行為遂行的な意味というものを見出すことができるからだという。

また、オースティンの間接的会話における「あなたは抗議したと言った（you said you protested）」や「あなたは抗議した（you protested）」という表現が使われていることからも明らかなように、行為遂行的動詞「抗議する（protest）」には発語行為の意味があるといえる。ここで、コーエンは翻訳の違いから明らかになることとオースティンの間接的会話における発語行為の説明で明らかにされていることは同じだと考えている。コーエンは、次のように結論づける。

顕在的行為遂行的表現が使われるとき、発語内的力（もしそのようなものが存在するならば）は意味と区別できない[7]。

「私は抗議する」という発言は、明らかに行為遂行的発言で、オースティンの説明に則して考えれば、この発言をする（issue an utterance）際、行為を遂行している。この種の発言が他の発言と区別される特別な発言であることを、コーエンは見落としている。

そして、それは一人称の動詞を含む発言の規定や非対称性に関するオースティンの説明を考慮に入れていないためである。コーエンの批判の要点と言える、行為遂行的動詞 protest が意味を持つということについて、コーエンはオースティンの主張を誤解している。

オースティンは、行為遂行的動詞には必ず力が含まれるとは考えていなかった。それは、コーエンが指摘したとおり、オースティンの間接的会話において示されていることである。しかし、「私は抗議する」と「あなたは抗議すると言った」は異なった発言であることをコーエンは見落としているのではないか。前者の発言は明らかに抗議する行為であるが、後者は報告または記述である。後者は発語行為を示しているが前者は行為遂行的発言である。後者の発言において用いられている行為遂行的動詞には意味しか含まれていないということから、前者の発言も同様に意味しか含まれていないということはできない。

前者と後者の発言を同様に扱うという意味で、コーエンの議論は、発語行為の範囲内に留まるものということができる。たとえ、「私は抗議する（I protest）」という行為遂行的発言を行っていても、その発言をする際何らかの行為をしているということを認めないならば、その発言は意味しか持たないかもしれない。しかし、これは実際の我々の経験にそぐわない。「私は抗議する（I protest）」と発言し、嘘をつく場合以外、抗議していないと思っている人はいないからである。嘘をついていた場合、それは不適切な発言になってしまう[8]。

力が存在する発言とは、何かを行っている発言のことである。すなわち、warn が「警告する」という意味を持つということではなく、その発言が警告する行為になるということである。発語行為における意味だけでは、行為遂行的発言の意味を規定できない。行為遂行的意味とでも呼べるようなものだとコーエンは主張するが、それが、発語行為における意味とは異なるということは説明していない。

次に、「私はあなたの干草の山に火がついていることを警告します（I warn you that your haystack is on fire）」という発言の動詞がどのようにして力を持つのかというコーエンの疑問を、事実確認的発言と行為遂行的発言が区別できないとするオースティンの理由を参照することによって明らかにしたい。

c　行為遂行的発言と事実確認的発言の区別

コーエンは、顕在的行為遂行的表現が発言内に生じないとしても、発語内的力という用語は役に立たない（otiose）としている。ここで、コーエンはオースティンの言う顕在化を批判している。今までの動詞の意義に関する批判に基づいて、行為遂行的接頭辞には意味が含まれるのであるから、顕在化されるのは意味である、という批判を展開している。「あなたの干草の山には火がついています（Your haystack is on fire）」という発言の力は警告（warning）である、とするオースティンの考えを想定し、「your haystack is on fire」には警告の意味が（オースティンの言う意味で力が非顕

在的に含まれているように）含まれるとしている。

（ア）「あなたの干草の山には火がついています（Your haystack is onfire）。」

（イ）「私はあなたの干草の山に火がついていることを警告します（I warn you that your haystack is onfire）。」

（イ）の発言の（部分の）意味として警告（warning）があるなら、（ア）の発言の意味として警告が（非顕在的にでも）含まれていないとはいえない。だから、顕在化されているのは意味であって力ではない、とコーエンは主張する。

そして、次の（ウ）（エ）で、顕在化されているのは意味であるということをより明確に示そうとしている。

（ウ）「彼は大きいのを捕まえた（He caught a large one）。」

（エ）「ジェームズは10ポンド以上の重さのますを陸揚げした（James landed a trout more than ten pounds in weight）。」

（ウ）を顕在化したものとしてコーエンが挙げた（エ）では、意義と指示としての意味は顕在化している。そして、以上のことからコーエンは、「私はあなたの干草の山に火がついていることを警告します（I warn you that your haystack is on fire）」において顕在化されているのは、意味ではなく力であるという根拠はないという主張を行っている。

コーエンのこの議論は、事実確認的発言と行為遂行的発言の区別が決定的ではないとするオースティンの議論を考慮にいれていない。オースティンの説明をコーエンの示している例と関連させながら、以下に説明していきたい。

（i）「私は謝罪する（I apologize）。」

（ii）「ジョンは走っている（John is running）。」

という二つの例をオースティンは挙げている。（i）は行為遂行的発言で、この発言が適切（happy）なら、すなわち謝罪の意志を持って発言されているのならば、この発言は謝罪する行為になる。それに対して、（ii）はジョンが走っているという事実に依存しているため、真または偽になる。この発言は事実確認的発言と言うことができる。しかし、この事実確認的発言と行為遂行的発言は次のような発言に言い換えられると変化を伴う。

（ii a）「私はジョンが走っているということを陳述する（I am stating that John is running）。」

オースティンによると、（ii a）の陳述が真であることは「ジョンは走っている」という発言の適切さ（happiness）に依存する。

それは「私は謝罪している（I am apologizing）」の真が「私は謝罪する」の適切さに依存するように。ここで、オースティンは、事実確認的発言は「私は陳述する」という言葉を前につけることによって、（ii）の信念内容を持っているかどうかが（ii a）の発言の真であること（truth）になると考えている。このように事実確認的発言も適切不適切になる。同様の変化は次の行為遂行的発言にも見られる。

（iii）「私は、雄牛が突きかかろうとしていると警告する（I warn you that the bull is about to charge）。」

この発言は、事実を指している。だから、もし雄牛が突きかかろうとしていなかった場合、この発言は問題になる。しかし、この発言は警告という行為は行っているのであるから、無効（void）ではなく、また不誠実（insincere）でもない。なぜなら、話者は雄牛が突きかかろうとしていると思ったからである。このような発言は、オースティンによると、偽（false）、または、誤ってしまった（mistaken）というべきで、陳述の側に近い発言である。

行為遂行的接頭辞が意味を含むとしても、（ii a）は、（ii）の適切であることの真に依存している。（ii）の発言が依存していたのは真偽であったが、（ii a）内に見られる（ii）の発言の部分は陳述するという動詞によって、適切不適切に依存するものとなるのである。それは、陳述する行為が真または偽であるために必要なことなのである。

コーエンの説明をこの例にあてはめて考えてみると、（ii）から（ii a）への発展に意味が顕在化したことになる。コーエンの説明では、（ii）の発言には陳述するという意味が非顕在的な仕方で含まれ、そして（ii a）では、陳述する意味が顕在化していることになる。しかし、オースティンが説明しているように、（ii）と（ii a）は全く異なった種類の発言である。（ii）の意味は真偽に対応しても、（ii a）は陳述する行為である。「陳述する」という動詞の意味が（ii a）を陳述する行為にしている。（iii）は、行為遂行的形式を持ちながら、事実との対応関係を必要とする発言である。警告という行為を行いながら、真または偽になる。このような仕方で、意味と力を一つの発言の中に見出すことができる。

また、コーエンの（ウ）（エ）で示された顕在化は、オースティンの考えている顕在化とは異なる。オースティンは顕在化という言葉に関して、次のように述べる。「私が何を行っているのかを説明すること（describing）や陳述すること（stating）と同じではない。（少なくとも哲学者がこの言葉を好むような意味で）。[9]」

しかし、コーエンは、以上のことを示したとしても、動詞には意味だけが含まれ力は含まれないと主張するかもしれない。しかしそれは、コーエンが、発言をする（issue an utterance）瞬間に何かの行為を遂行しているということを、動詞の意味よりも重要視せずに、行為遂行的発言の分析を行っているためである。

d　発言の行為的側面

発言が行為になるということは端的に分かることであって、明らかに何らかの行為になる発言が存在することが、発言の力を否定することを難しくしている。オースティンは「私は賭ける（I bet）」、「私は謝罪する（I apologize）」などの発言は典型的な行為遂行的発言だとしている。コーエンが、動詞の力を認めないならば、発言が行為になるということを否定していることになる。コーエンの例である「私はあなたの干草の山に火がついていることを警告します（I warn you that your haystack is on fire）」という発言における行為遂行的接頭辞は、オースティンの説明と照らし合わせても明らかに行為遂行的発言である。なぜなら、「私は警告する（I warn you）」という発言は一人称・単数・直接法・能動態・現在形の動詞を含むからである。オースティンによれば、この種の文法形式を有する発言の場合、言うことがすぐさまその発言の動詞の意味が表している行為を遂行することになる。この種の動詞は、発言が行為になるという行為遂行的発言の本質的特徴を示している。しかし、コーエンが、この動詞を含む発言には、意味しか含まれていないということを説明したとしても、それはオースティンの議論に対する批判とはなりえない。なぜなら、オースティンは、動詞よりも、発言が行為であるという現象がまず先にこなければいけないと考えているからだ。

ある発言が一人称・単数・直説法・能動態・現在形の動詞を含んでいたとしても、その動詞を含む発言が何かの行為であるということが前提されなければ、この文法的規準は不完全なものとなってしまう。この文法的規準を満たしている発言が全て行為遂行的発言であるとは限らないのだ。現実の言語がそのようなしくみを持っているため、完全な規準にはならないのである。例えば、オースティンの挙げている、典型的な行為遂行的発言である、「私は賭ける（I bet）」も習慣的な行動を説明している場合は、賭ける行為にはならない。「私は、彼を相手にして、雨が降る方に（毎朝）6ペンス賭ける（I bet him (every morning) sixpence that it will rain）」という発言を見てもこのことは明らかである。一人称・単数・直説法・能動態・現在形の動詞は行為遂行的発言であることを特徴づけるのに重要ではあるが、決定的ではない。オースティンは、次のように述べている。

> 「もし、発言をする（issue an utterance）ことが、何かの行為ならば、「私（I）」そして「能動態」「現在形」は適当であるように思われる。[10]」

一人称の形式を三人称などに置き換える仕方で行為遂行的発言を確かめる方法をオースティンは行っているが、これを非対称性による方法と呼ぶことができる。「私は警告する（I warn）」は、三人称にすると、「彼は警告する（He warns）」となり、ある行為を記述する発言になる。このようにある動詞が三人称に置き換えられた場合に一人称と異なるならば、warn が行為遂行的動詞であると判

断することができる。非対称性に違反する例としては、「私は走る（I run）」と「彼は走る（He runs）」があげられる。このように、「私は走る」という発言が行為遂行的発言ではないことが分かる。また同様の方法で見た場合、「言う（say）」という動詞も行為遂行的動詞にはなりえない。

行為遂行的発言における力は意味のことであると言うために、コーエンは「私は～と警告する（I warn that）」という一人称・単数・直説法・能動態・現在形の動詞を含む行為遂行的発言の例を考察して力にあたるのは意味であるという主張を行った。確かに、コーエンの挙げている例は行為遂行的発言であるため、オースティンを論駁しているかのように見える。しかし、既に説明したように、コーエンは意味の説明しか行っておらず、オースティンの事実確認的発言と行為遂行的発言の区別ができないということに関する分析を考慮に入れていない。また、オースティンの非対称性による方法において示された動詞の違いも考慮に入れていない。コーエンの分析に従えば、一人称の動詞も三人称の動詞も報告の発言において見られる動詞と同様に扱うことになってしまう。しかし、明らかに、「～と私は約束する（I promise that…）」と「～と彼は約束した（He promised that…）」の発言に見られる行為遂行的動詞は異なり、そして、「～と私は約束する（I promise that…）」と「～と私は言う（I say that…）」、「～と彼は言った（He said that…）」は異なる[11]。

コーエンが動詞に力という要素を認めないとしたら、彼の挙げている「私はあなたの干草の山に火がついているということを警告します（I warn you that your haystack is on fire）」という発言における that が間接的会話における that と区別できなくなる可能性がある。間接的会話における that は報告している場合の that である。オースティンは、行為遂行的動詞 promise を含む行為遂行的発言「～と私は約束する（I promise that…）」における that を、非対称による方法から行為遂行的動詞ではないと判定された say を含む「～と言う（I say that…）」の that とは区別している。後者が、報告や間接的会話における that である。「～と私は約束する」という発言について、オースティンは次のように述べている。

> 「何が言われたかがどのように理解されるべきかを明確にし、そして、この発言形式は約束が行われた『ということを陳述（states that）』しているかもしれない。しかし、私達は、この発言が真または偽であること、そして、記述や報告であると言うことはできない。[12]」

このことは、既に言及した、コーエンが発語行為の範囲内でしか議論を行っていないということと関連させて考えることができる。

Ⅱ意味と力の区別

意味と力とを区別することができないという批判が、コーエンの批判の中心である[13]。コーエンは以下の二点を挙げ、発言が意味と力によって構成されているということに疑問を突きつけている。①は、オースティンの主張、そして②は、顕在的行為遂行的発言における発語行為の問題である。

①発語内行為と発語行為は同時に存在する。全ての発言は意味と力の両方を持つ。

②顕在的行為遂行的発言を行った際、発語内行為を行っている。しかし、このとき発語行為は行っているのか。

発語行為と発語内行為は、それぞれ、事実確認的発言、そして行為遂行的発言に関係づけられる[14]。発語行為がどのようなものであるかは、報告の発言、三人称の発言、非対称性の方法から外れた動詞などを含む発言は、行為遂行的発言とはいえないということから明確になった。この種の発言は、言葉を発することがすぐさま行為にならないタイプの発言である。このことは、動詞の意味が全て力を含むとは言えないということを示している。

また、完全な意味での「言う」ということは、発語行為である。そして、発語行為が発語内行為でもあるということは、発言が、状況によってどの行為が遂行されるのか規定されるということに関連している。基本単位である「言う」という行為と、状況によって何を行っているのか明確になる行為という区別は必要である。

オースティンは、現実の発言は多様で、全く同じ発言の形式が、ある状況では、事実確認的発言に、また、別の状況では行為遂行的発言になりうると言う[15]。発言形式によって発言の種類を特定することが困難であるという洞察から、オースティンは、発言の状況の重要性を指摘している。発語行為は状況によって発語内行為になる。

オースティンは次のように述べている。

「発語行為を遂行する時、私達は発話（speech）を用いる。しかし、厳密には、どのようにしてこの状況でそれを用いるのか[16]」

また、発語内行為に関する説明として次のように述べる。

「発言の状況は非常に重要である。そして、使用された言葉は、その言葉を使用しようとした、あるいは、実際にその言語的交流で語られたその脈絡（context）によって、一定限度「説明」されなければならない[17]」

発言形式によって、事実確認的発言と行為遂行的発言は区別でき

ないということが判明した後に残るものは、発言が状況によってどのような行為になるかということだけである。このことを基礎にしてオースティンは、発語行為、発語内行為、発語媒介行為を区別しているのである。

結論

コーエンの発言の意味に関する説明は、オースティンの発語行為の説明と矛盾しない。コーエンの挙げた議論はオースティンの発語行為の説明に留まり、オースティンの行った力の分析、すなわち発語内行為の分析には至っていないということができる。コーエンは発言の行為的側面を見落としている。コーエンの議論から、発言には力が意味の他に含まれるというオースティンの主張を覆すことはできない。純粋な事実確認的発言は意味だけを含むかもしれないし、純粋な行為遂行的発言は、力だけを含むかもしれない。しかし、現実の発言では、意味と力は切り離すことは難しく、多くの場合、この二つの側面を発言は持つのである。事実確認的発言と行為遂行的発言が区別されないということから、発語行為と発語内行為は同時に存在するといえる。しかし、それらは概念的には区別されるのである。

【注】

（1）Austin, P.90.
（2）Austin, P.32.
（3）Cohen, P.425.
（4）Austin, P.97. オースティンは、意味行為なしでも用語行為はありうるが、用語行為なしに意味行為はありえないと述べている。
（5）Austin, P.59.
（6）Austin, P.59-P.60.
（7）Cohen, P.426.
（8）サールは、John Searle and His Critcs, P.84. において、オースティンとは対照的に、偽の陳述や嘘は完全に有意味な言語行為であると主張している。
（9）Austin, P.69.
（10）Austin, P.67.
（11）サールは、意味行為を報告する間接話法の形式「～と彼は言った（He told me to…）」という動詞句には発語内的力が含まれると主張し、オースティンの発語行為の概念を批判している。サールは、tell という動詞を命令、要求、助言などを表す行為遂行的動詞と同様に扱っている。しかし、オースティンは、非対称性の方法によってこの動詞を意味行為の説明に使っているものと考えられる。
（12）Austin, P.70.
（13）服部、P.135. でも次のように述べられている。「コーエンの批判を見てくると、その批判の核心が、意味行為と発言内行為の区別は可能であるか、という点にあることがわかるであろう。」
（14）Austin, P.145.
（15）Austin, P.67.
（16）Austin, P.99.
（17）Austin, P.100. オースティン著、坂本百大訳 『言語と行為』 P.173. における訳を参考にした。

【文献表】

オースティン、一九七八年、『言語と行為』坂本百大訳、大修館

服部裕幸、「言語行為論と会話の含意（Ⅰ）」、アカデミア、人文・社会科学篇、vol. 53, 1991.

Austin, J. L. *How to Do Things with Words,* Harvard University Press, second ed. 1975.

Cohen, L. J. Do Illocutionary Forces Exist, in Fann, *Symposium on J. L. Austin,* Routledge, 1969.

Lepore. E and Gulick, R., (ed.) *John Searle and His Critics,* Blackwell, 1991.

Searle, J. R. Austin on Locutionary and Illocutionary Acts, Philosophical Review, vol.77, 1968.

Force and Meaning in Illocutionary Acts.
-Cohen's view on Illocutionary Acts examined-

Ena YASUMOTO

According to Cohen, the concept of illocutionary force is empty. Cohen clarifies this point by showing how the performative prefix includes meaning. However, it cannot be stated from this fact and other arguments, that it is the meaning instead of the force that is being made explicit in an illocutionary act. It is possible to accept certain aspects of Cohen's view and state that it is the force instead of meaning that can be found in an utterance. However, I do not attempt to show such a view, instead I would like to clarify some important ideas found in Austin's text, so as to show that Austin's distinction between Force and Meaning is necessary in its own way.

Key Words

Meaning, Force, Illocutionary Act, Locutionary Act, Performative, Constative, Cohen, Austin